だんじり吉兵衛（並松町）

ずうっと昔、この浜に吉兵衛っちゅう、それはそれはだんじり好きな者がおったんや。年中仕事しながら、

「チキチン　ドコドン　チキチン　ドコドン　エーヤ　ソーリャ・・・・・」

と、お囃子をやっていた。そやから、祭りには飯食う間もだんじりから離れへん。太鼓も叩けば笛も吹くが、それがまたごっつい上手で、みんなはいつも聞きほれたもんや。

そんなある年、皆くたくたにくたびれて帰ってしもたが、吉兵衛は一人で、お堀の水に映る提灯をみてるうちに寝てしもた。ふっと足がこそばいので、寝呆け目をあけると、たぬきが二匹足元に座って代わる代わる足を舐めてた。

「折角よう眠ってるのに・・・。」

と、すぐに目をつむったが、またこそばい。

「どないしたんな。やめんかえー。」

たぬきはじっと吉兵衛を見ている。よく見ると、たぬきは何か頼んでいるようや。吉兵衛はやっとそれに気がついて、

「どないしたんや？・・・。」

すると、たぬきはしっぽで太鼓を叩く真似をして頭を下げたそうな。

「太鼓をたたきたいんか。うーん・・・。」

たぬきたちは嬉しそうに何度もうなずいた。吉兵衛も大好きな太鼓や。早速小太鼓をトコトン、トコトン・・・と打ち出した。それに合わせて、たぬきは嬉しそうにしっぽで太鼓を叩く。何度か繰り返すと次に

大太鼓をせがんだ。それを繰り返すうちに夜が明けてきた。たぬきたちは何度も何度もお辞儀をし、嬉しそうに踊りながら何処かへ消えてしもうた。

こんな夜やったのに、だんじり大好きの吉兵衛のこっちゃ。次の日も元気でだんじりについて走り回った。夜の曳き回しも終わり、明日は宮入りやから早よ寝とこうと、太鼓の横に寝転ぶとすぐにいびきをかきだした。

昨日からの疲れでぐっすり眠っていると、不意に傍の小太鼓がトコトンと鳴った。

吉兵衛は、「うう・・・」と言っただけ、次にドコドン、ドコドンと鳴ったのにまだ目が覚めない。今度は大きな音で鳴った。吉兵衛はよっぽど疲れてたんやなあ。なかなか起きんよって、たぬきは連れてきた子だぬきたちを呼んで小太鼓と大太鼓を叩きだした。さすがに吉兵衛も頭をもたげ、

「お前らも祭りを楽しみたいんやなあ。しっかり覚えるんやでぇ。」

そんなことがあった年から、祭りが終わると、風に乗って祭り囃子が聞こえてくるようになったんや。

海の向こうの神戸あたりに引っ越した人も聞いたちゅうほど吉兵衛に習ったたぬきの仲間も増え、たぬきの祭りにもなってしもうたんやなあ。